

国際仏教学大学院大学

いとくら

ITOKURA

日本古写経研究所 ニュースレター

復刊の辞 / 落合 俊典

《特集『金剛場陀羅尼経』》

国宝『金剛場陀羅尼経』について / 赤尾 栄慶

国宝『金剛場陀羅尼経』の三つの謎 / 落合 俊典

《古写経紹介》

布施美術館所蔵の五月一日経 / 林寺 正俊

興聖寺本『法華論』 / 浅野 学

《宋版大蔵経研究の現在》

東禅寺版の千字文番号函収納に関する一案 — 両面刷という視点から — / 牧野 和夫

《仏教文献学・書誌研究の最前線》

仏教書誌研究プロジェクト / 末木 康弘

書評：前島信也『敬西房信瑞の研究 — 鎌倉浄土教典籍論 —』 / 上杉 智英

若手研究紹介：『提謂波利経』の研究 / 新田 優

《寺院紹介》

最勝王寺 / 前島 信也

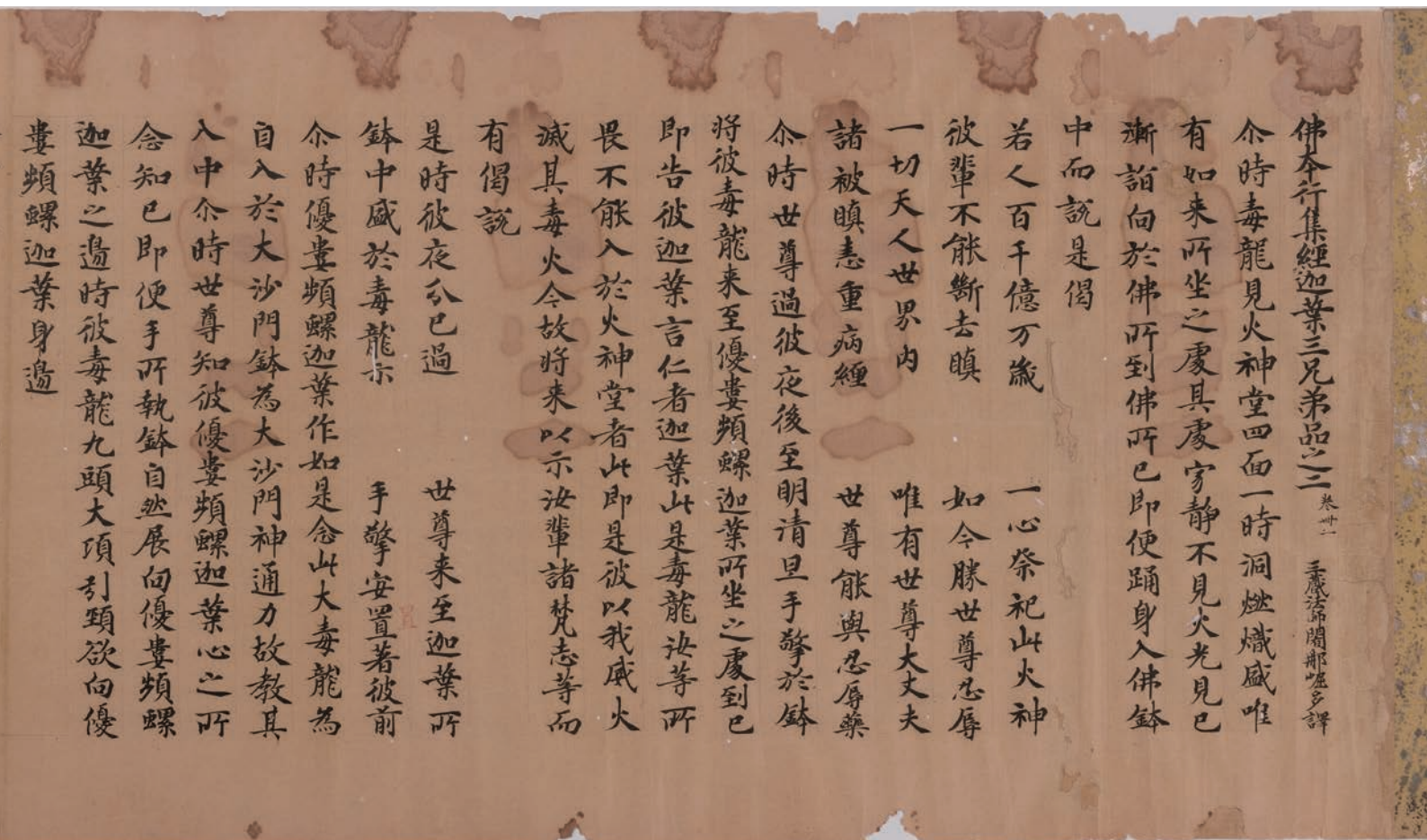
《活動報告》

日本古写経研究所の活動と成果(2015~2021年度) / 前島 信也

日本古写経データベース紹介 / 前島 信也

奈良朝勅定一切経データベースの構築 / 赤塚 祐道

第11号
2022.3



佛本行集經迦葉三兄弟品之二

卷十一

三蔵宮閣那囉多譯

今時毒龍見火神堂四面一時洞燃熾盛唯
有如來所坐之處其處穿靜不見火光見已
漸詣向於佛所到佛所已即便躡身入佛鉢
中而說是偈

若人百千億萬歲

一心祭祀山火神

彼輩不能斷去瞋

如今勝世尊忍辱

一切天人世界內

唯有世尊大丈夫

諸被瞋恚重病纏

世尊能與忍辱藥

今時世尊過彼夜後至明清旦手擎鉢

將彼毒龍來至優婁頻螺迦葉所坐之處到已

即告彼迦葉言仁者迦葉此是毒龍汝等所

畏不能入於火神堂者此即是彼以我威火

滅其毒火今故將來以示汝輩諸梵志等而

有偈說

是時彼夜已過

世尊來至迦葉所

鉢中盛於毒龍示

手擎安置著彼前

今時優婁頻螺迦葉作如是念此大毒龍為

自入於大沙門鉢為大沙門神通力故教其

入中今時世尊知彼優婁頻螺迦葉心之所

念知已即便手所執鉢自然展向優婁頻螺

迦葉之邊時彼毒龍九頭引頸欲向優

婁頻螺迦葉身邊

復刊の辞

落合俊典

「いとくら」という名称は第一号(二〇〇六年)から十号(二〇一五年)を刊行してようやく関係者に知られる用語となり誠に喜ばしいことであったが、振り返ると、二〇〇五年度から始まった学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」事業に続き戦略的研究基盤形成支援事業が文部科学省の支援で行われ二〇一四年度に終了し、同時に「いとくら」も発刊を休止した。その後は主に中国国家図書館古籍館との共同事業「宋版思溪藏復刻本」に取り掛かり、二〇一八年六月に完成した。二〇一九年十一月二十三日には岩屋寺で一切経供養会が、同月二十五日には後樂園ドームホテルで本学主催の祝賀会が開催された。尾張高野山宗総本山岩屋寺の後藤泰真座主や関係する研究者等が大勢雲集した。中国からは中国国家図書館古籍館の陳紅彦副館長、上海師範大学の方廣鋤教授等これまた大勢の関係者が集い刊行を祝したのであった。

かくして刊本大蔵経の取り組みが一段落したが、奈良写経に焦点を当てる古写経が発見されたのもこの時期である。堺市博物館堀川亜由美学芸員の案内で赴いた法道寺(大阪府堺市)に所蔵されていた『雑阿含経』巻三十六は、高野山金剛峯寺の光明皇后願經五月十一日経『雑阿含経』巻三十九(重要文化財)と同時期に同人に依って書写された経巻であることが判明したのであった。この経巻を研究し

た林寺正俊論考「本文テキストから見た法道寺所蔵の天平写経『雑阿含経』の特色」(『日本古写経善本叢刊』第十輯所載)は実に画的であった。長らく不明とされてきた五月一日経に散見する朱字の校勘の原本がまさにこの法道寺にあった五月十一日経だと分かったのである。五月一日経と五月十一日経、大変紛らわしいが後者は現存する経巻僅か十点である。法道寺本が加わり十一点に増加したとはいえずに僅少である。中国の刊本大蔵経の嚆矢を飾る開宝藏(北宋勅版)もほぼ同数の十二巻という。孰れも丁寧に保存管理し、一切経研究の重要な文献資料としなければならない。

このようにして、自ずと奈良写経を中心に研究事業を進めるように至った。二〇二〇年度から二〇二四年度までの五ヶ年間文部省科学研究費基盤研究(A)「奈良朝勅定一切経」の総合的研究―漢文仏教テキストの資料的基盤の再構築に向けて―に採択され機運が弥増しに醸し出されてきた。

さらにこの動きを加速させているのが、本号にも取り上げている、日本古写経で最古の写経本『金剛場陀羅尼經』である。巻末の教化僧宝林の願文には「丙戌」とあり、従来はその年を西暦六八六年としてきた。ところが紙背には「天平十八年」と書かれた文字があることを藤本孝一氏(元文化庁調査官・現龍谷大学客員教授)が報告し、その反論として赤尾

栄慶氏(京都国立博物館名誉館員・日本古写経研究所特別研究員)は『日本古写経研究所紀要』第七号に新たな論文を投稿され一気にヒートアップしてきたのである。筆者も立場見解を述べざるを得ず本号に小文を認めたが、問題点を十分に指摘し得たか覚えない。

小川本『金剛場陀羅尼經』が昭和二十六年(一九五二)に国宝とされ、その後文化庁が買い上げた。本経については幾つかの小論が見られるが、筆者の見るところ本格的かつ十分な調査研究が行われてこなかったのではないかと危惧する。そこで仏教学の立場からチベット語訳と異訳本を含めた原典考証を行い、文献学的観点から調査研究を実施すべきであるという結論に達した。日本古写経の系譜が国宝本・天平写経本(五月一日経)・平安写経本(興聖寺一切経・七寺一切経等)に明瞭に示されているとともに、開宝藏(高麗版・金藏の底本)や宋版思溪藏などの刊本大蔵経との相違も見えてくることであろう。一、二年後にその成果が現れると確信している。

このような時期に「いとくら」も復刊し、さらに幅広い人々のために日本古写経研究の取り組みを紹介されることを期待するとともに江湖の惜しみないご支援を願う所である。

(国際仏教学大学院大学教授・日本古写経研究所所長)

目次

《巻頭言》 復刊の辞	落合 俊典 (1)
《特集『金剛場陀羅尼経』》 国宝『金剛場陀羅尼経』について	赤尾 栄慶 (3)
国宝『金剛場陀羅尼経』の三つの謎	落合 俊典 (4)
《古写経紹介》 布施美術館所蔵の五月一日経	林寺 正俊 (5)
興聖寺本『法華論』	浅野 学 (6)
《宋版大蔵経研究の現在》 『東禅寺版の千字文番号函収納に関する一案 一両面刷という視点から』	牧野 和夫 (7)
《仏教文献学・書誌研究の最前線》 仏教書誌研究プロジェクト	末木 康弘 (8)
書評：前島信也『敬西房信瑞の研究 一鎌倉浄土教典籍論一』	上杉 智英 (9)
若手研究紹介：『提謂波利経』の研究	新田 優 (11)
《寺院紹介》 最勝王寺	前島 信也 (12)
《活動報告》 日本古写経研究所の活動と成果(2015~2021年度)	前島 信也 (13)
日本古写経データベース紹介	前島 信也 (14)
奈良朝勅定一切経データベースの構築	赤塚 祐道 (14)
既刊書・スタッフ紹介	(15)

いとくら：私たちが調査している古写経を収める「経蔵」からの造語。「経」を意味するサンスクリット語“sūtra”には「いと」などの意味があり、また「経」には「たていと」という読みがあることから、「経蔵」を「いとくら」と読んでニュースレターのタイトルとしました。

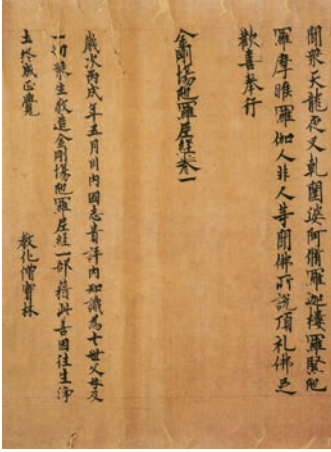
国宝『金剛場陀羅尼經』について

赤尾 栄慶

平成二十八年(二〇一六年)十一月十二日に国際仏教学大学院大学で開催された第2回公開研究会では、藤本孝一龍谷大学客員教授の「国宝『金剛場陀羅尼經』は最古の写本か! —評郡制度と奥書—」の発表があり、書写年代の通説である天武天皇十五年(六八六)に異議を呈した内容が披露された。その後、その概要は『日本古写経研究所研究紀要』第三号に「国宝『金剛場陀羅尼經』と評について」(四三~四八頁)と題された論考として寄稿された。

その発表と論考は、巻末部分の紙背にある墨書「天平十八年」(七四六)と奥書にある「評」の使用例にこだわり過ぎたのではなかったかと思う。

古写経を前にしてその書写年代を考える場合は、まず字すがたを観察しながら、巻末に書写奥書があるかどうかを確認する。そこに元号の年紀があつて、字すがたや料紙の風合いに齟齬がなければ、それで問題なしとなる。もし奥書がなければ、その字すがたが、奈良時代なのか平安時代なのか、また鎌倉時代なのか、これまでの経験値の物差しはどこに当てはまるかを考え、料紙の風合いと違和感がないかを見る。字すがたと料紙の風合いのどちらを優先するかと言えば、字すがたになる。



国宝『金剛場陀羅尼經』巻末部分
〔文化庁監修 国宝10 書跡Ⅱ〕より

今の『金剛場陀羅尼經』の場合、奥書はあるが書写年代を示す年号が「歳次丙戌年」とのみあることから、今一度、奥書に加えて書誌情報や字すがたなどを総合的に判断し、その書写年代を考えてみる必要があるだろう。念のため、その奥書を示しておく、

歳次丙戌年五月川内国志貴評内知識為七世父母及一切衆生敬造金剛場陀羅尼經一部藉此善因往生淨土終成正覺 教化僧宝林

となつている。

まず本文と奥書は一筆であり、その字すがたについては、従来からの指摘のとおりである。字すがたは背が高く、中国初唐の書家として名高い歐陽詢(五五七~六四一)の子である歐陽通(?~六九一)が筆を執り、唐の龍朔三年(六六三)に刻された「道因法師碑」に近似しており、明らかにその書法の影響下にある字すがたといえる。また文武天皇二年(六九八)に造られたと考えられる長谷寺所蔵の国宝「銅板法華說相図(千仏多宝仏塔)」の銘文の字すがたに酷似している



奈良・長谷寺所蔵、国宝「銅板法華說相図」銘文の一部
〔聖地をたずねて—西国三十三所の信仰と至宝—
京都国立博物館・読売新聞社(二〇二〇、一八五頁より)〕

ことも重要な点であり、これと近い時期の書写と考えて問題がない。

年紀が干支表記のみであることに關しては、藤原宮出土木簡などでも大宝律令制定以前の年紀記載を持つ木簡は

一様に干支表記となつていたりことや飛鳥時代の金石文も文武天皇の慶雲年間をさかいとし、それ以前は干支表記となつていたりすることを重要視すべきであろう。また「郡」が「評」と表記されていることも勘案し、この奥書が大宝元年(七〇一)以前の表記と見るのが合理的であると考える。

また本巻で見過ごされがちな箇所が二点ある。第一点目は翻訳者名の下にある「備」の文字であり、第二点目は巻末の軸付け部分の近くで料紙が染まっていな箇所が見られることである。第一点目の「備」字については残念ながら現在のところ不明と言わざるを得ない。第二点目については、料紙を継いだ後から染めた痕跡かと考えられ、まるで反物を染めるかのように染め汁に浸けつつも、それを引き上げるために末尾を染め汁の外に出しておいた結果、染まっていな部分が出来たと見られる。巻末部分が染まっていな写本で最も顕著な例としては、大英図書館スタインコレクションの正始元年(五〇四)の書写奥書を有する『勝鬘義記』(S二六六〇)がある。

問題の「天平十八年」の墨書については、おそらく後人—近世か近代の人—が「丙戌年」を「天平十八年」と考えて、そのように墨書したものと考える。その文字の筆線には力強さと抑揚がなく、木筆または穂先の状態が悪い筆で書いたように見える。抑々、天平十八年に書写されたのであれば、奥書に「天平十八年歳次丙戌五月」と書けば何ら問題がないはずであるし、そのように書かれたと考える。干支のみの表記や「評」の使用例などには当然のことながら例外もあるが、その例外を採用するかどうかは字すがたを含めた書誌情報などの全体像を俯瞰してからのことになろう。

詳しくは『日本古写経研究所研究紀要』第七号に寄稿したので、そちらをご覧いただきたい。これで、やや遅くなった感はあるが、公開研究会の席での反論者として名が挙げられていることに對する責任を果たしたいと思う。(京都国立博物館名誉館員・本学日本古写経研究所特別研究員)

国宝『金剛場陀羅尼經』の二つの謎

落合 俊典

「天平十八年」の謎

近年、国宝本『金剛場陀羅尼經』には幾つかの謎が秘められていることが分かってきた。その一つは、藤本孝一氏が紙背に「天平十八年」の墨書があると指摘したことから俄然書写年代の論争に突入したのである。これを認めると奥書にある「丙戌」が天平十八年（七四六）となり、最古の紀年（六八六）のある写経としての地位が揺らぐ。藤本孝一氏が示した写真には確かに紙背に「天平十八年」の文字が認められる。思わず息が止まるような驚きであった。

筆者の率直な感想は、養鸕徹定師の文字に見えた。養鸕徹定師はなかなか剛毅な僧侶であり、古写経などに直接書き込むことが多い。そのような例を幾つも見てきたからかやや文字の書体に見慣れてきていても、飽くまで筆者の感想に過ぎない。具体的に検証したわけではないので「天平十八年」に関して贅言できる時期でないことをお断りしなければならぬ。ただ養鸕徹定師の『古経搜索録』や『古経題跋』は数多くの古写経を熟覧した記録でありながら、それらの実物を偶々か見ると『古経搜索録』に書かれた寸評や贅言がそのまま現れることに一驚する。



『金剛場陀羅尼經』
紙背 透過光撮影
（日本古写経研究所
紀要『第三号』口絵より）

「備」の謎

次に、内題とその後が続く訳者号の下に「備」とある文字の意味である。これは千字文ではない。この時代に一切経に千字文は使用された例がない上に、そもそも「備」は千字文に入っていないのである。それではこの「備」の意味は何か。国宝本であるだけに興味が尽きない。

この問題を考察する前に、大正蔵本（底本高麗再雕本）、

国宝本（六八六年）、五月一日経（七四〇年）、興聖寺一切経本（十二世紀後半）、七寺一切経本（十二世紀後半）の五本を比較してみた。この中で、「備」は国宝本と五月一日経の二本だけに見られる文字である。つまり両本は同系統の写本と推定される。もちろん綿密な校訂においてもそれは実証されるが、ここでは紙面の都合で省いている。この作業だけでは両者の前後関係は確定できない。天平写経本を底本として国宝本が書写された可能性が残る。

この「備」については従来殆ど考察されてこなかったが、極めて重要な意味が秘められているのではないかと考える。それはもしこの一文字が所有者を示す字と仮定するならば自ずと右大臣吉備真備の名が出てくるからである。その可能性を援護する例を二点挙げよう。

一点は宮内庁書陵部蔵の新羅玄二撰『無量寿経記』である。巻首欠であり、本文は奈良時代もしくは新羅の書写と見られるが、後補の表紙に「吉備公」とある。何らかの記録があつてそのように後代の人物が貼付したに違いない。当初筆者は、吉備真備は何故仏典の写本を所有していたのだろうか、という疑問を抱いていた。それが少し溶けてきたのが二点目である。それは近年報告された鴻臚寺丞李訓墓誌に記された「日本国朝臣備書」である。吉備真備留学中の唐代の受け入れ役所鴻臚寺の秘書長であつた李訓の墓誌に、能書家（？）であつた「日本国」の「朝臣」の「備」が書したという点である。撰文は楮思光であるが、外夷の倭国の役人にそのような重責を担わせることはあり得ないという論調も見られる。しかし、もしこれが事実であつたならば、吉備真備は日本を代表する書家であり、かつ漢籍だけでなく広く仏典仏書を蒐集した人物となるであろう。この問題を点をさらに探求する必要があると言えるのである。

「巻一」の謎

その三は、尾題にある「金剛場陀羅尼經卷一」である。「巻一」と書かれていれば、当然巻二、もしくは巻三などが予期されるが、本経は一巻本である。院政期写本の興聖寺一切経本と七寺一切経本はともに「一巻」となっている。大正蔵本は「巻」そのものがない。ただ単に「金剛場陀羅尼經」となっているだけである。五月一日経はどうなっているかを見ると「巻」だけである。「金剛場陀羅尼經卷」は全く意味をなさない尾題である。ただししかしルーパーを近づけてみると「経」と「巻」の間の右側に小さい朱字で「一」と書かれているのである。五月一日経に散見する朱字は従来不明であつたが、近年林寺正俊氏が光明皇后願経の五月十一日経であると推定し底本の正体が見えてきたのである。

このことは五月一日経本は国宝本を底本にして書写してしたが、尾題の「巻」の箇所での誤りに気づき、「一」を書かなかつたのではないだろうか想定可能である。逆に五月一日経本を底本にして国宝本が書写したと仮定することは難しい。何故ならば尾題の「巻」の先が無いにも関わらず「一」を入れることになるからである。

なお内題の下にあつた「備」については、五月一日経の書写者は、能書家の吉備真備の署名と気づかずそのまま書写したのではないだろうか。

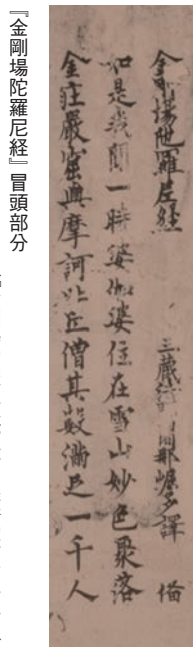
もちろん飛鳥白鳳奈良の七、八世紀の時代に国宝本、五月一日経、五月十一日経の三点だけではなく、国宝本の底本など他にも書写本があつた。そのことは『正倉院文書』の記録によつて容易に窺われる。今後の詳細な検討が求められる。

【参考文献】

藤本孝一「国宝『金剛場陀羅尼經』と評について」、『日本古写経研究所紀要』第三号、二〇一八年、四三―四八頁。

林寺正俊「本文テキストからみた法道寺所蔵の天平写経『雜阿含経』の特色」、『日本古写経善本叢刊第十輯・法道寺蔵天平写経雜阿含経卷第三十六』岩屋寺蔵思溪版高僧伝巻第一、国際仏教学大学院大学日本古写経研究所、二〇一九年、九三―一〇二頁。

（本学教授・日本古写経研究所所長）



『金剛場陀羅尼經』冒頭部分

（『金剛場陀羅尼經』武田墨彩堂、一九三八）

布施美術館所蔵の五月一日経

林寺 正俊

布施美術館所蔵の仏典

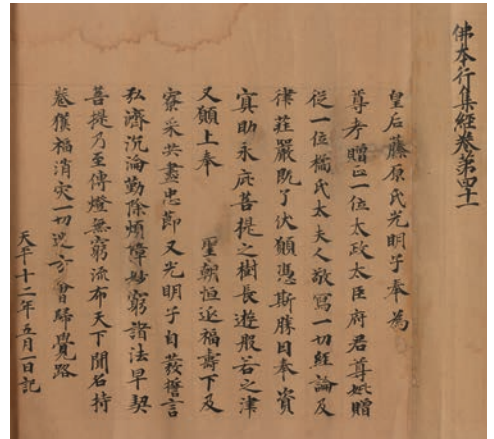
本号の表紙を飾っているのは、布施美術館に蔵される光明皇后願經の五月一日経（『仏本行集経』巻第四十一）巻首の写真である。滋賀県伊香郡高月町にある布施美術館は、同町出身の布施卷太郎（一八八一～一九七〇）によって蒐集された絵画・工芸品・書跡などの一大コレクションを蔵しており、その中核は近代日本画家の巨匠富岡鉄斎（一八三七～一九二四）の絵画・陶磁器等から成る。しかし、そのほかに同館は当該五月一日経をはじめ薬師寺経・中尊寺経・神護寺経といった奈良・平安期の古写経、さらには宋版・高麗版といった版経などの仏典類も蔵している。いずれも貴重な仏典資料に相違ないが、日本古写経の規範的存在という点ではやはり何と言っても五月一日経が白眉であろう。

光明皇后発願の五月一日経

五月一日経とは聖武天皇の皇后である光明子（七〇一～七六〇）の発願により書写された一切経のことで、経巻末尾に「天平十二年五月一日記」という日付の願文が付されていることからこう呼称されている。この願文において光明皇后は亡き父母の追善・聖武天皇の福寿・臣下の忠誠を願うとともに、みづからは衆生救済と仏法流布を目指すことを誓っている。

五月一日経の書写は、唐から帰朝した玄奘（げんぼう）がもたらした当時最新の経録『開元釈教録』（七三〇年撰）に基づき、かつ彼自身が将来した経巻を底本にして開始された。当初は『開元釈教録』「入蔵録」所掲の一〇七六部五〇四八巻を整備すべく書写が進められたが、途中で方針が変更され、最終的には総数約七千巻になったと推定されている。また、勘経を経たことに

佛本行集経卷第四十一



布施美術館所蔵五月一日経『佛本行集経』尾題と願文

の七五〇巻を中心として、巷間に流出したものを含めて約一千巻に限られる。布施美術館の五月一日経は、まさにその現存する数少ない貴重な経巻の一つなのである。

『佛本行集経』巻第四十一

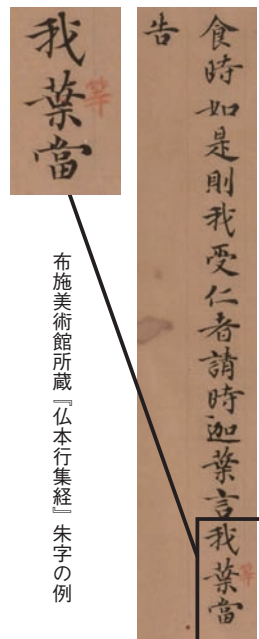
では、その中身は何かといえば、『佛本行集経』の第四十一巻である。『佛本行集経』は北インド出身の闍那崛多（Dharmagupta ジュニヤーナグプタ）によって隋の開皇七（五八七）～五九二の間に訳出された、全六十巻・入六十章（中）から成る長編の仏伝である。本経はインドにおける複数の部派が伝えた異なる伝承を取りあわせて出来た仏伝で、経名に「集」の字が冠せられるのはそのためと推定されている。サンسكريット原典やチベット訳は知られていない。

本経の第四十一巻は、成道後に伝道を始めた釈尊による様々な弟子たちの教化を説く諸章のうち、祭火（火神）を崇拜していた迦葉（あしかす）（カシーヤ）姓の三兄弟に対する教化を説く「迦葉三兄弟品」（第四十四章）に相当する。

同経巻に見られる朱字

五月一日経には本文の右横に小さい朱字が書かれていることがある。それは異体字や読み訂正を記したもののようであるが、布施美術館本にもそうした朱字が二十箇所に見られる。

よってテキストトとして高く信頼・評価されたため、同時代の他の一切経の底本ともされるようになった。今日現存する五月一日経は宮内庁正倉院事務所所蔵



布施美術館所蔵『佛本行集経』朱字の例

その多くは異体字を示したものとと思われるが、本文の読みに関わる箇所もあるので紹介しておきたい。それは、迦葉の発言「我葉當告」のうちの「葉」の右横に記された朱字の「等」である。

求められる読みは「我等は當に告ぐべし」であるから「等」が正しく、「葉」では意味をなさない。写経生による誤写か、あるいは底本通りの忠実な書写かは俄かに断定できないが、しかし迷いを感じさせない堂々たる筆致からすると後者の可能性の方が高いように思われる。

筆者は以前に『雜阿含経』の五月一日経と別種の光明皇后願經である五月十一日経とを比較して、朱字が五月十一日経の本文に一致すること、そして両願經の底本が異なることを指摘した（当該拙稿については本号4頁の落合教授論攷「参考文献」参照）。残念ながら『佛本行集経』の五月十一日経は現存しないためこうした比較はできないが、おそらく「葉」の字は別本に基づいて朱で正しいあるべき読み「等」に訂正されたものである。五月一日経の朱字はそうした勘経の跡ではないかと筆者は推測しているが、詳細な検討は別の機会に譲りたい。なお、『佛本行集経』の五月一日経は宮内庁正倉院に十七巻分が残っており、布施美術館本は今後それらの諸本や他の日本古写経本と合わせて検討される必要がある。

〔追記〕筆者は令和三年十二月十八日に落合俊典教授とともに布施美術館において当経巻を熟覧調査する機会に恵まれた。その折に同館館長の布施秀茂氏、高月観音の里歴史民俗資料館学芸員の佐々木悦也氏にも大変お世話になった。記して各位に感謝申し上げる。

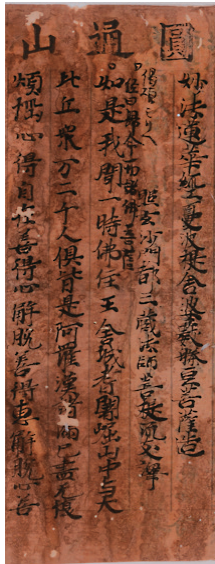
（北海道大学大学院准教授）

興聖寺本『法華論』

浅野 学

京都市上京区にある円通山興聖寺は、虚応円耳（一五五九〜二六一九）を開山とする、臨済宗興聖寺派の本山である。同寺には、計五二六一帖に上る一切経が伝わっている。興聖寺一切経は、院政期に書写された西楽寺一切経を中心とするが、後の移管先である南山城の海住山寺で補写されたものや版経等も含まれている。『興聖寺一切経調査報告書』（一九九八年）に拠れば、興聖寺には、一巻本の菩提流支訳『妙法蓮華経憂波提舍』（院政期写本）と、二巻本の『妙法蓮華経優波提舍』（鎌倉時代刊本）という二種の『法華論』が収められているという。二〇二二年十一月、筆者はそれらの現物に対する調査を実施した。

世親撰『法華論』は、『法華経』の注釈書であり、従来、『大正蔵』所収の菩提流支訳『妙法蓮華経憂波提舍』、及び勒那摩提訳『妙法蓮華経論優波提舍』という二種の漢訳が知られていた。これら既知の諸本と校合すると、興聖寺本には、興味深い点が見られた。



興聖寺写本 卷首

まず院政期写本の巻首の訳者名に「照玄沙門都三蔵法師菩提流支訳」とあり、このような肩書で記される流支（或いは留支）訳は、他に見当たらない。通常は、大正蔵本のように「後魏北天竺三蔵菩提留支」と記されるか、叡山版のように「三蔵法師菩提流支」と記されている。なお「照玄沙門都」とは「昭

玄沙門都」の誤写と考えられ、北魏に置かれた宗政行政を管轄する昭玄曹の副沙門統に相当する都維那を指している。

次に院政期写本の本文は「如是我聞」という一句から始まっているが、「如」字の上に補入記号があり、右側の行間に「偈頌シリへ／経曰歸命一切諸佛菩薩」という書入れがある。その前半にある「偈頌シリへ」とは裏書きを示す注記であり、現物を確認した結果、その紙背には確かに「頂礼正覚海」云々の帰敬頌が記されていた。また後半の「経曰歸命一切諸佛菩薩」（以下、帰命頌）の有無は、『法華論』のテキストシステムを判定する上で重要な決め手ともされている。

二〇二〇年四月に刊行された望月海慧・金炳坤編『妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』では、円弘撰（七三三年以前）『妙法蓮華経論子注』所引の『法華論』を基準として、流支訳の古形を伝えている江戸期の版本の意義を顕彰している。

金炳坤「二〇二〇A」によれば、「帰命頌を有するテキストトこそが流支訳『法華論』の古形と規定され得る」という。院政期写本は、書入れの帰命頌をどのように解釈するかの問題が残っているため、判定が難しい。しかしながら、金炳坤「二〇二〇B」の「自此已下示現所説法因果相応知」という一文の有無と配置によって『法華論』の諸本を五種に選り分け（分類法に従えば、「自此已下示現所説法因果相応知」の一文を「序品」ではなく「方便品」に配置している院政期写本は、古形の流支訳と同じシステムとなる。



興聖寺写本 自此

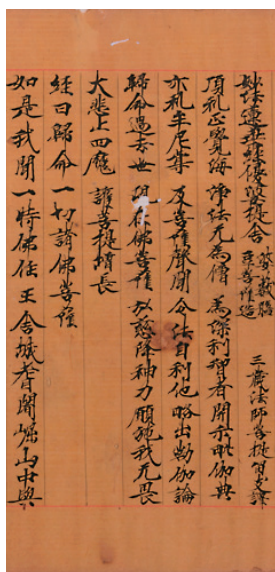
落合俊典「一九九二」によれば、興聖寺所蔵の一切経の中に、「唐仏教の正統な蔵経を転写したものが含まれている」という。そうすると、興聖寺本『法華論』一巻本は院政期の写本ではあるが、内容が古形の流支訳と同じシステムに属するならば、奈良写経の転写本である可能性も高いと思われる。

一方、菩提留支訳である興聖寺蔵鎌倉時代刊本には「自此已下示現所説法因果相応知」の一文が、「序品」にあり、「方便品」

にない。また、高麗再雕本を底本とする大正蔵本菩提留支訳『法華論』などでしか見られない「又依義撰三故…等故」の五十二字を欠くため、聖語蔵本（S.1825）や金剛寺本、房山石経、黄檗版の留支（或いは流支）訳と同じシステムとなる。

因みに、二〇二二年十二月、七寺所蔵の菩提留支訳『妙法蓮華経優波提舍』一巻（写本）について調査した結果、同本は帰命頌を有する上、「自此已下示現所説法因果相応知」の一文が「方便品」に置かれていることが新たにわかった。

なお本稿の詳細は、拙稿「興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』解題・翻刻」（仙石山仏教学論集）第十三号、二〇二二年刊行予定）を参照されたい。



七寺写本 卷首

【参考文献】

拙稿「二〇二二」興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』について」

『印仏研』第六九卷第二号

京都府教育委員会編『興聖寺一切経調査報告書』

京都府古文書調査報告書第十三集、一九九八年

落合俊典「一九九二」興聖寺本『馬鳴菩薩伝』について」

『印仏研』第四一巻第一号

金炳坤「二〇二〇A」世親『法華論』の流伝に関する諸問題―見直されるべきテキストを中心として―望月海慧・金炳坤編『妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』法華経研究叢書Ⅱ

金炳坤「二〇二〇B」流支訳『法華論』の流布本について―序品を中心として―同上書

岡本一平「二〇二二」書評 望月海慧・金炳坤編『法華経研究叢書Ⅱ 妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』『日蓮学』第五号

（本学日本古写経研究所RA）

東禪寺版の千字文番号 函收納に関する一案

— 両面刷という視点から —
牧野 和夫

現存の福州版一切経は、ほぼ六面一紙一板、一面は六行で一行十七字が基本である。ところが、調査過程の初期段階で五面一紙一板を帖のほぼ半分辺りに挟む帖冊が複数現れ、後半には頻出するようになる。特に一板一紙六面（半折）毎面六行全三十六行各行十七字で規格統一された東禪寺版の内、ほぼ十八紙以上を貼継いだ帖は、その半ばに当たる紙数の一紙のみ一板一紙五面六行全三十行となることが多く、東禪寺版の特徴の一つとなっていたのである。

既に「福州宋版大藏經の研究—宋版一切経の「一板五面三十行」に関する一考察—」（『実践女子大学文学部紀要』五十三集、二〇一〇年）を公刊し、両面刷との関連に言及した。幸い既に知恩院藏・醍醐寺藏の宋版調査に携わる機会を頂き、福州版大藏經に両面刷りの傾向が顕著に認められ、特に東禪寺版に著しい点は了解していたからであった。

更に留意すべき事例が東禪寺版には存在した。「除六行要粘策二辺不厚薄」などという十二、三文字内外の注記を版心などに刷印した帖冊が東禪寺版には認められたのである。「六行」が「半折（一面）」に当たり、「除六行」が一面分の本文を除くこと、「厚薄」即ち左右両辺の厚い・薄いに係わることであろうと推測はできた。

東禪寺版主体の醍醐寺藏宋版一切経の目録の公刊によってその全貌が明瞭になったのは幸いであった。

佐々木勇氏が「宋版一切経思溪版の版式転換—一紙六面から一紙五面へ—」（『いとくら』一〇号、二〇一五年）に、その持つ意味を解釈され明らかにされた（但し、補刻時点での五面に関する疑問への回答注記を彫ったものか）。以下に本誌『いとくら』掲載の一文を引用する。「一帖のみであれば、紙継ぎによる両辺の厚さの差は微々たるものである。しかし、一帙十帖と音釋帖を積み上げた時、左右両辺の厚さの差は、放置できないものとなったのであろう」という指摘は拙論の傍証とみることもできる格別に貴重なものであった。かくて、千字文番号函への收納に際して「積み上げ」られた十帖プラス字音帖（基本で例外も少なくない）の「高さ」が問題で、即ち「積み上げた高さ」が函の内則を超えた場合の「両面刷」に帰着するのではなからうかと考えるに至ったのである。両面刷と積み上げた「高さ」の相関の具合を検討することになる。醍醐寺藏には両面刷の帖冊が少なくない。基本形の一帙十帖と音積帖の含両面刷の典型的な例は一先ず措き、特別な七帖と音積の函の例を採り挙げる。一紙は三折である。醍醐寺藏・340「訓」函は、字音積には印造印なし、他は全て「福州東禪經／生林傑印造」が捺される。

五面一板一紙を挿入することは、単なる一帖分の左右両辺の均等をはかったものではなく、千字文番号函（八角輪藏などを想定、包紙紙でくるむケースも）の收納分の積み上げた高さの総計に係る問題であった。醍醐寺藏宋版一切経の内、両面刷りの帖冊が認められる千字文函を漏れなく検討すると、ほぼ積み上げ合計が140紙≡420折≡150紙≡450折（前見返し2面分・字音分の厚さや帙表紙分の厚みを除く。経摺表紙の右辺側の偏りの原因である紙継の一紙の厚さや押さえ竹の高さなどの合計を加えても180紙≡一帖18紙の「高さ」の十帖分のみ。紙継糊代分除く）≡540折以内の「高さ」に収まることになる（この基準に該当しないごく少数の函があるが、醍醐寺藏には、おそらく基準を異にした別のセット（一藏）のものが配されたものか）。「五面」は、この右辺の偏りを許容した基準を前提にしたうえで「左右均等」への微妙な配慮が働いたものと考えられるべきか。

【参考文獻】
佐々木勇「宋版一切経思溪版の版式転換—一紙六面から一紙五面へ—」、『いとくら』第十号、二〇一五年二月、七〜八頁。
牧野和夫「福州宋版大藏經の研究—宋版一切経の「一板五面三十行」に関する一考察—」、『実践女子大学文学部紀要』第五十三集、二〇一〇年二月、一〜二二頁。

【訓字音】≡6折・2紙
【彌沙塞羯磨本】≡72折・31紙 両面刷
【十誦羯磨比丘要用】≡59折・19紙 両面刷
【優波離問佛經】≡55折・18紙
【曇無德律部雜羯磨】≡65折・28紙 両面刷
【羯磨】≡72折・31紙 両面刷
【四分比丘尼羯磨法】≡50折・16紙
【彌沙塞羯磨本】≡72折・31紙 両面刷
【十誦羯磨比丘要用】≡59折・19紙 両面刷
【優波離問佛經】≡55折・18紙
【曇無德律部雜羯磨】≡65折・28紙 両面刷
【羯磨】≡72折・31紙 両面刷
【四分比丘尼羯磨法】≡50折・16紙
【訓字音】≡6折・2紙

で、計426折≡142紙（紙数通り片面刷では162紙）の「高さ」である。次に439「仙」函の一帙六帖と音積のケースを紹介する。醍醐寺藏・439「仙」函 東禪寺版、印造印の無い字釈以外は、王愈・王□の印造。

【参考文獻】
佐々木勇「宋版一切経思溪版の版式転換—一紙六面から一紙五面へ—」、『いとくら』第十号、二〇一五年二月、七〜八頁。
牧野和夫「福州宋版大藏經の研究—宋版一切経の「一板五面三十行」に関する一考察—」、『実践女子大学文学部紀要』第五十三集、二〇一〇年二月、一〜二二頁。

仏教書誌研究プロジェクト

末木康弘

仏教書誌研究プロジェクトは、仏教の文献学的研究の基本資料となる仏典に関する目録・解題等、研究論著の文献目録、研究史、研究者の著作目録や業績論評等を収集し、内容を精査の上、書誌情報を分類・体系化した著作物として公表して学徒の便に供することを第一の目的とし、この事業を継続して推進するための人材育成を第二の目的として二〇一九年四月に発足した。現在の研究スタッフは、主任研究員の末木康弘と研究員の信賀加奈子（本学附属図書館職員）の二名である。

仏典は周知の通り、仏教の伝播により、サンスクリット語、パリーリ語、チベット語、モンゴル語、中央アジアの古典語、漢語等の言語で伝承されている。これら仏典の写本・版本はアジア圏のみならず、イギリス、ドイツ、フランス、ロシアをはじめとする欧米諸国にも多数所蔵され、それら所蔵機関によって十八世紀より今日に至るまで多くの目録・解題等が出版されているが、その全容を知ることが容易でなく、さらに特定のテキストに関する校訂本、翻訳、研究論著を網羅的に収集することは、各種データベースが整備されつつある今日においても、当該分野の専門家でない限り、多大な労力を要する。

このような事情に鑑み、仏典目録をはじめ前述の書誌学的研究成果を網羅した、仏教書誌の書誌 (Bibliography of Buddhist bibliographies)、『Bibliographical Sources for Buddhist Studies: From the Viewpoint of Buddhist Philology』(以下、

BSSと略す。)を本学附置国際仏教学研究の叢書として一九九八年に上梓し、補遺を一九九九年より二〇〇一年まで三冊、増補改訂第二版を二〇〇八年に刊行した。より多くの学徒の利用を考慮して、記述言語は英語とし、日本語と中国語の文献の書誌情報にはローマ字の翻字を加え、英文タイトルを補記した。本書及び後述の増補改訂デジタル版が斯界にて好評を得ていることが、本プロジェクト設置の契機となっている。

近年は、著作物の刊行形態も冊子の他、デジタル情報としてインターネット上に公表されるものも増加し、著作権の保護期間を過ぎた刊行物も国立図書館やアーカイブで公開されている。冊子で刊行された論著であっても、機関リポジトリやAcademia.eduにより公開される傾向にあり、学術情報の共有化が加速している。このような趨勢に対応すべく、BSSもデジタル版として公表することとし、二〇一二年四月より年二回、四月と十月に書誌情報を更新したPDFを本学のWebサイト『学術成果コレクション』にて公開している。BSS内の書誌情報の相互参照を可能とし、書誌情報から外部情報源に直接アクセスできる仕様になっているので、現在では入手困難な資料でもインターネット上に公開されていれば閲覧が可能となっている。本年度は、Version 2.8~2.9を公開した。

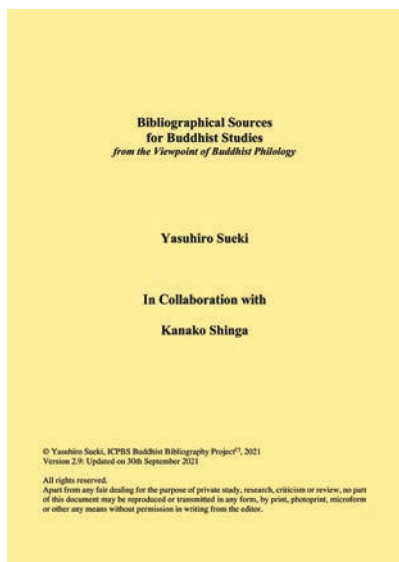
BSS編纂の一環として、各機関が所蔵する仏典写本・版本コレクションの歴史を辿り、それらコレクションの概要を示して、編纂された目録・解題等について検討した論攷を、本学開講科目の「仏教学特殊研究」にて各年度に一回発表している。令和三年度は題目「ロシアに所蔵される仏典写本・版本のコレクションとその目録」を発表した。その増補改訂版を『国際仏教学

大学院大学研究紀要』第二十六号(二〇二二年三月刊行)に掲載予定である。

その他、ネパール・ルンビニーのルンビニー国際研究所(Lumbini International Research Institute)の図書業務支援を行っている。同研究所長と緊密な連携を図り、日本で出版された仏教関係図書を購入し、米国議会図書館方式で目録・分類・装備し現地へ送付するとともに、現地での業務支援者を派遣している。

本学の歴史を辿ると、霊友会図書室(The Reiyukai Library)として一九六二年頃より図書の収集を開始、一九六七年九月には韓国の海印寺にて『高麗大藏経』を受領、一九八二年一月に国際仏教学研究(The International Institute for Buddhist Studies)と改称、一九九六年四月に開学し現在に至っている。この約六十年間に収集された図書資料は、国内外にて高く評価されている。本プロジェクトは、この蔵書を活用して、さらに内容の充実したBSSの編纂を目指す。

(本学仏教書誌研究プロジェクト主任研究員)



前島信也

『敬西房信瑞の研究』

—鎌倉浄土教典籍論— (法藏館、二〇二二)

上杉 智英

本書は国際仏教学大学院大学日本古写経研究所の研究者である前島信也氏が、二〇一八年度に大正大学大学院仏教学研究科へ提出された博士論文を加筆・修正し、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）を受けて上梓されたものである。構成は以下の通り。

口絵

序

第一篇 信瑞とその著作

第一章 信瑞に関する伝承

第二章 著作に関する伝承

第二篇 信瑞著作の書誌学的整理

第一章 『浄土三部経音義集』

第二章 『広疑瑞決集』

第三篇 信瑞著作に見る教学背景

第一章 『浄土三部経音義集』—信瑞の宋代仏教文化の受容—

第二章 『広疑瑞決集』—説話文学の受容—

第四篇 信瑞の思想—『広疑瑞決集』の思想とその特徴—

第一章 諏訪信仰をめぐる

第二章 浄土思想

結

〔資料〕

〔付録〕

本書は、法然房源空の上足である長楽寺隆寛・法蓮房信空の弟子、敬西房信瑞（？～一二七九）を研究対象とし、その人物像、及び教学背景を明らかにすることを目的としたもの

のである。通常、特定の人物の思想とその背景を明らかにするには、本人の著作を一次資料として考察するのが定石である。現存する信瑞の著作としては、以下の四点が知られている。

- ① 『浄土三部経音義集』全四巻
- ② 『泉涌寺不可棄法師伝』全一卷
- ③ 『広疑瑞決集』全五巻
- ④ 『明義進行集』巻第二・三

しかし、従来これらを包括した信瑞像は描き出されていない。それは、①『浄土三部経』の音義書、②入宋僧で北京律の祖とされる俊仍の伝記、③諏訪信仰者である上原敦広の疑問に答える問答集、④他宗から法然の教えに帰依した八人の言行録、と個々の著作の性格があまりにも異なるためと推測される。それぞれは字音研究、俊仍研究、諏訪信仰研究等の資料として個別に研究対象とされてはきたが、それらを総括して信瑞像が明らかにされることはなく、信瑞研究は群盲評象の様相を呈していた。

このような問題意識より本書は、取り分け基礎研究が脆弱な『浄土三部経音義集』および『広疑瑞決集』の基礎研究、すなわち書誌学的研究と引用典籍の精査を行うことで、信瑞の著作活動の意義を総体的に捉え直し、信瑞の人物像および教学背景を明らかにする（六頁）ものである。



本書の研究視座は「信瑞の著作を信瑞の著作として読む」という当然のものであるが、それが従来なされてこなかったことは、信瑞の多彩な著作を総合的に読解することの困難さを物語るものと言えよう。また、その手法は「諸本を収集・整理し校訂して読む」「序跋の駢儷文は駢儷文として読む」といった至極真つ当なものである。取り分け前者は古典を読む上で必須の工程であるが、その実直な文献学的手法は「第二篇 信瑞著作の書誌学的整理」において遺憾なく発揮されている。

『浄土三部経音義集』に関しては写本十七点を収集するが、前島氏の搜索は国内に留まらず、清末・中華民国初期の学者で『日本訪書志』『古逸叢書』の編者として著名な楊守敬（一八三九～一九一五）によって購入、または書写され持ち帰られた台湾国家図書館蔵本、中国国家図書館蔵本の五点も実見している。それらの関係、並びに資料価値を明らかにした上で、現行の活字本三本を含む計二十本の本文系統を整理し、現存諸本の関係を图示している（二二五頁）。

『広疑瑞決集』に関しては三点の写本の他、原本は焼失しマイクロフィルムとして伝存する彰考館本、大正大学附属図書館所蔵の青焼複写本の五点を収集する。書写奥書のなしい知恩寺本の書写年代を原装幀と文字・訓点より丹念に推定する過程は、古写本に対した際に何れの点に着目し判断すべきかが具体的に示されており、一つのモデルケースとして文献学に興味を有する初学者には是非一読いただきたい。

また、完本でありながらその来歴・本文系統が不明な大正大学附属図書館所蔵の青焼複写本についての考察は複写技術の歴史にも及び、青焼本が実際には青焼（シアズ式複写）ではなく、青写真（サイアノ式複写）であることを論証している。この下りは一見冗長に感じるかもしれないが、複写の原本が誰によって書写されたのかを考察する上で複写時期の特定は前提として重要である。青写真が用いられていることより青焼が普及する一九五〇年代以前と考えられ、前島氏は原本の書写者を伊藤祐晃（一八七三～一九三〇）と推測されている。青焼の普及により「青写真」は衰退し、

現在では設計図面に多用されたことより転じた「計画」「将来設計」を意味する言葉としてしか口の端に上ることはなくなった。本書はその失われた技術によって伝存した本文の重要性を知恩寺本との比較によって明らかにし、翻刻を付録している。

以上、「第二篇 信瑞著作の書誌学的整理」は新知見に富み、日本古写経研究所研究員として日夜、写本の調査・研究に勤しむ前島氏の面目躍如たるものと言えよう。

なお、彰考館本については「潜庵閣蔵書記」の印記より徳川斉昭（一八〇〇～一八〇六）の蔵書であったことに言及されているが、国学者の小山田与清（一七八三～一八四七）が弘化三年（一八四六）に徳川斉昭へ蔵書を献納した際の目録と考えられる早稲田大学図書館蔵『松屋蔵書目録』には「広疑瑞決集 一」との記載が二箇所に見え（第五号一四丁表・第七十四号四二丁表）、その来歴が伺えることを附言しておく。

ところで、本書には博士論文になかった副題「鎌倉浄土教典籍論」が追加されているが、はたして信瑞の著作を以て「鎌倉浄土教典籍論」を語ることは妥当であろうか。これは知名度の低い信瑞の属性「鎌倉（時代）」「浄土教」を明示し、購買層を広げようという単なる販売上の方便であろうか。これは本書を手にした際の率直な疑問であった。

さて、もとより一〇〇〇頁を超える本書を十全に評するだけの紙幅（及び能力）はなく、ここでは特筆すべき成果の一つに言及したい。「第三篇第一章『浄土三部経音義集』—信瑞の宋代仏教文化の受容—」では、『浄土三部経音義集』の序跋により「編纂の動機は、信瑞在世当時に経文の正確な文字とその理解が失われていることに対する危機感」（二二二頁）とし、その撰述に宋版（思溪版）大藏経を依用していることを実証した上で、「信瑞は宋代仏教を積極的に受容していた」「それを提供する「場」を担ったのが泉涌寺であったと考えられる」（二六一頁）と述べるが、この両者「信瑞の危機感」と「宋代仏教の受容」は無関係ではない。従来の読誦音と異なる宋音、既存の本文と異

なる宋版。南宋文化の流入が信瑞にアイデンティティクラ イシスをもたらしたことは想像に難くない。既存のテキストと新たに宋より伝来したテキストの相違による危機感。それは序文の「音謬らば功浅く、語誤らば義失う」（一九五頁）に吐露されている。『浄土三部経音義集』の撰述は、南宋文化の流入による従来の伝承誦音・本文の揺らぎが、鎌倉時代の僧伽の直面した一大問題であったことを浮き彫りにしており、この点において新たに追加された副題「鎌倉浄土教典籍論」は決して商業上の謂いではなく、実に適切に本書の功績を言明したものと見えよう。前述の勘繰りを恥じる。この問題は浄土教に限ったものではなく、同時代資料である嘉禄三年（一二二七）に高山寺の義林房喜海（一二七八～一二五二）によって編纂された『新訳華嚴経音義』の成立を勘案することにより、さらに「鎌倉仏教典籍論」として昇華されるものである。本書は鎌倉時代の一僧である信瑞の著作の読解を通じて信瑞像を描き出すが、それが信瑞一人に留まらず広く鎌倉仏教の直面した問題までを明らかにしている点は特筆に値する。

なお、『浄土三部経音義集』の序跋について附言すれば、序文「自非略其差舛集其正義、彰徳大範難矣」（一九五頁）は漫句ではない。「重疑」は「重ねてなぞらえるに」（二〇八頁）ではなく、上の句に付き「逾病」と対をなす。跋文に「典故を有する表現は確認できないが」（二〇三頁）とするが、「華紐」（四分律）、「管見」（莊子）、「膠柱」（史記）、「脂車」（漢春秋）、「反唇」（史記）等（二〇二頁）がみられる。これらにより本書の結論、並びに功績は何ら揺らぐものではない。ただし、伝来した本文を正しく読むことこそが信瑞を理解するという行為に他ならない。「付録」「大正大学附属図書館所蔵『広疑瑞決集』翻刻」には「中弓」の語注として「意味取れず。次の「法師原」に対応する語句か」（七四二頁）とする。これは指摘の通りで「法師原」に対応する「中弓」の誤写と考えられ、本来、前行の「行者」「人力」に附されたものであろう。中世叡山の階級が使用される点に信瑞の教学背景が垣間見られよう。

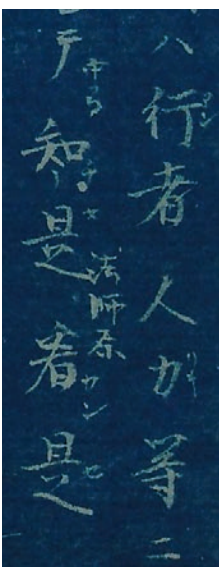
この他、本書では信瑞加本より移点したとする奥書有する東洋文庫岩崎文庫所蔵の版本『選択集』や、大谷大学所蔵『言泉集』の末尾に見える信瑞が編纂したとされる願文集『勸策要林』の存在にも言及されている。これらの検討を通じ、さらに信瑞の知られざる一面が明らかにされることを期待するのは望蜀であろうか。

本書は『浄土三部経音義集』序文末の「冀くは見る者添削して洪範の至蹟を形せ」（二〇九頁）という信瑞の言葉を受けとめてその著作と向き合い、群盲評象であった信瑞研究に光明をもたらすものである。また、本書には口絵カラー図版八点と、「資料」として『浄土三部経音義集』諸本異同比較表、採録語句・出典一覧、『広疑瑞決集』引用説話 原典比較表、「付録」として知恩寺所蔵『広疑瑞決集』巻第四影印・翻刻、大正大学附属図書館所蔵『広疑瑞決集』翻刻、知恩寺所蔵『広疑瑞決集』声点一覧、『広疑瑞決集』振仮名一覧を掲載する。これらは信瑞研究のみならず、国文学・国語学においても有益な資料を提供するものであり、広く諸氏に活用されることを期待する。

【参考文献】

- 尾上寛伸「中世期比叡山の階級制度―「中弓」及び「下僧」を中心として―」、『印度学仏教学研究』第十一卷第二号、一九六三年
- 松本智子「早稲田大学図書館蔵『松屋蔵書目録』翻刻」、『早稲田大学図書館紀要』第五七号、二〇一〇年
- 学々木勇「新訳『大方廣佛華嚴経』音読史における喜海撰『新訳華嚴経音義』の音注」、『訓点語と訓点資料』第一三六号、二〇一六年

（京都国立博物館研究員）



正大青焼本三五丁裏
（部分）

『提謂波利經』の研究

新田 優

疑經『提謂波利經』が撰述されたのは、北魏の太武帝によって廢仏が断行された後、続く文成帝により国家を挙げて仏教復興が行われた只中であつた。撰者は沙門曇靖。二巻本とされるが現存写本は全て断簡で、完本は得られていない。本經は疑經として経録上で排除され、永らく散逸したとされてきた。しかし一九四一年、塚本善隆氏が逸文二十一条を蒐集しその性格を論じたことから本經の研究が始まつた。塚本氏は在家の五戒を中国在来の五行説と関連付ける教説に注目し、これを民衆に平易に五戒を説くためと論じた。さらに時代背景や『統高僧伝』『曇靖伝』の記述から、その撰述意図を「廢仏後焚蕩せられた經典の欠を補うため」と述べた。

一九六四年以降、牧田諦亮氏らにより敦煌本『提謂波利經』が発見され、塚本氏蒐集の逸文を遥かに上回る量の經文が提示された。それにもかかわらず以降の研究は、中国思想の援用箇所や、他の疑經・道教經典との関係など、經文の一部に着目し個別のテーマとして論じるばかりで、新出の經文を通読し、改めて本經の性格・位置づけを検討するものは皆無であつた。こうした研究状況は、塚本説の妥当性に起因するものであるが、そこには再検討の余地も見出される。民衆が対象とはいえ、五戒は五行思想を用いて説かねばならないほど複雑なものではない。また「經典の欠を補うため」にわざわざ疑經を撰述するだろうか。南朝より經典を輸入するほうが効率的なはずである。

こうした疑問から、筆者は博士学位論文において、塚本氏以降顧みられることのなかつた『提謂波利經』撰述意図

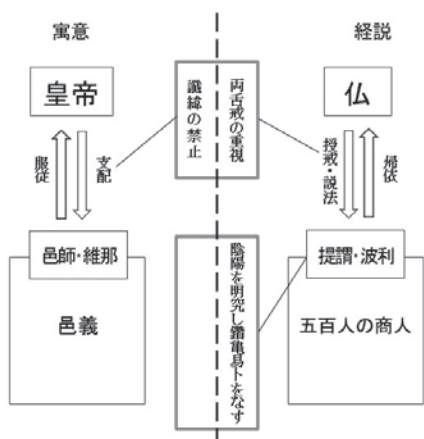
の再検討を行った。

疑經は多くの場合、当時の人々や社会の要求が既存の經典では満たされない時、仏の金口を借りて撰述されるものである。そこで本論文では、写本・逸文を整理し、可能な限りテキストを復元した上で校訂・訳注を行い、「疑經の撰述意図は既存の經典に見られない編輯や創作箇所こそ顕現する」という仮定のもと、他の經典には見られない『提謂波利經』独自の教説二点を検出した。一つは提謂と波利の人物像を「陰陽を明究し、鑽龜易卜する者」とする点、もう一つは両舌戒を重視する点である。通常五戒は殺生・偷盜・邪淫・妄語・飲酒の順で配列され、その価値の優劣は説かれない。しかし本經は妄語を両舌とし、五戒を五行に配当して、中国の土王説を根拠に土行にあたる両舌戒を五戒の長とする。これは配列上の偶然ではない。五戒を五行に配当する文脈でのみ両舌戒の位置を変更しており、明確な意図を持って五戒の順序が変更されている。曇靖はなぜこうした改変を行つてまで両舌戒を強調したのであろうか？

これらの意図を読み解くため、撰述の背景である太武帝による廢仏と文成帝による復仏を一連のものと捉え考察した。太武帝が廢仏断行に至つた原因は諸説あるが、本論では廢仏詔ならびに太平真君五年の詔を検討することで、仏教の「夸誕大言」「誕言」が王法を乱すとして断行され、それは仏教の呪術的側面が讖緯と同等視されたためであることを明らかにした。また続く文成帝の復仏令は単に廢仏令を解くのみならず、沙門統の設置や、「仏教は王政を助けるもの」と明記する復仏詔からも、国家の監督下において「皇帝即如来」の論理により仏教を統治に用いる政策であつたことが分かる。

こうした時代背景を踏まえて本經独自の教説を読み解くと、曇靖の撰述意図が浮かび上がってくる。本經では対告

衆である商人団の長者提謂と波利を「陰陽を明究し、鑽龜易卜する」、すなわち讖緯を行う者と設定し、その二人に仏が五戒を授けて仏弟子とし、とりわけ両舌戒を重視する。これは当時廢仏の原因として問題視された讖緯・誕言を、仏教の論理によって取り締まるものと解釈される。提謂・波利が従える商人団は当時の邑義、提謂・波利は邑義を統轄する邑師・維那にあたり、提謂・波利及び商人団の仏への帰依は皇帝への従属の寓意であると解釈できる。『提謂波利經』は仏教を廢することで統治するのではなく、仏教の論理により在家信者の信仰団体をそのまま皇帝の支配下とする政治的意図のもとに撰述されたものであり、従来言われる「庶民經典」「民衆經典」ではない。



【『提謂波利經』の経説と寓意】

*詳細は国際仏教学大学院大学ホームページ学術成果コレクションにて公開中の二〇一九年学位(博士)請求論文、「『提謂波利經』の研究」を参照。

【参考文献】

- 塚本善隆「支那の在家仏教特に庶民仏教の一經典―提謂波利經の歴史―」、『東方学報』京都第二二冊三分、一九四一年
- 『北朝仏教史研究』塚本善隆著作集第二巻、大東出版社、一九七四年再録

(国際仏教学大学院大学卒業生)

最勝王寺

筑波山大法源院最勝王寺は、茨城県桜川市

真壁町、筑波山の西麓にある天台宗寺院です。

天応元年（七八二）に最仙が開基し、延暦十一年

（七九二）に最勝王寺の勅号を賜わり、延暦寺最

初の末寺となつたとされています。現在までの

詳細な沿革は不明ながらも、かつては最勝王寺

の約二キロ南西にある椎尾山薬王院と一体化し

ており、明治四年（一八七二）に分離されました。

思溪版大蔵経

最勝王寺には、茨城県指定有形文化財に指定される五千五百三十五巻の經典を所蔵しています。これらは、中国宋代に製作された思溪版大蔵経（五二九五巻）、後代の補写本（二三八巻）、日本で刷られた和版（二〇二巻）で構成されています。

この思溪版が最勝王寺に納められた経緯は、以下のように伝わっているようです。

昔、大陸の皇帝であった仁宗が夢のなかで、自身が日本武蔵国岡部・六弥太忠純（澄）の生まれ変わりであること、そしてそれは上野国世良田山長楽寺開山栄朝禪師に帰依した功德によるものであることを神人から告げられた。



最勝王寺全景

仁宗はそれを信じ、その恩義を返すために一切経を含めた多くの財宝を三艘の船に分けて日本へ送り出した。そして、そのうちの一艘が常陸の浜に着き、長楽寺へ運ぶ途中に最勝王寺に止まり、そのまま寺宝として納められた。しかし、境内に建てられた碑文には、經典を納める箱書きに文永七年（一二七〇）の墨書があることを述べ、あくまでも伝説として伝えられているようです。

寛永寺版の校合本

また寛永十年に天海僧正（一五三六〜一六四三）が、寛永寺版の一切経を開板する際に、最勝王寺の經典を校合に使用し、その対価として寛永寺版百二十巻余りを寄贈しました。現在もそれについての文書が現存しています。

於武州東叡山慈眼大師就

一切経開板当寺宝蔵之一切経

為校合附被取寄開板成就之

間令返納了経卷之損失悉以

令修補其上今度開板之内新本

百廿余卷令寄附畢自今以後

弥無紛失様可有守護者也。

慶安元年仲冬廿三日（花押）

最勝王寺

現在、最勝王寺所蔵の經典のうち、和版は

二百二巻とされていますが、この半数以上が

天海版と考えられ、伝来する間に徐々に増えて

いったものと考えられます。

愛知県岩屋寺との縁

また、『大般涅槃經』卷第三十五の奥書に以下の記述がある点に注目されます。

大般涅槃經第三十五闕本安永三甲午五月

依尾州巖窟寺宋本補之

補闕願主 山門禪林院実乗

書写 山門金蔵院克詮

卷第三十五は安永三年（一七七四）に補写された

経卷です。願主・書写者の山門禪林院・山門金蔵

院は、どちらも比叡山のある滋賀県大津市坂本の

天台宗寺院です。その経緯は不明ですが、最勝王

寺の宋版一切経を、同じ版をもって補おうとした

意思を見ることができます。

そして、その補写に使用されたのが尾州巖窟

寺、現在の愛知県南知多町にある岩屋寺所蔵

の思溪版大蔵経です。

岩屋寺所蔵の思溪版大蔵経は、『愛知県史』

編纂を機として、当研究所で二〇一三年より

調査を行っておりました。二〇一四年には中国

国家図書館古籍館との共同編集により、中国

国家図書館所蔵と岩屋寺所蔵などを底本に

思溪版大蔵経を復刊させる事業が立ち上げら

れ、二〇一九年に完成しました。

茨城県の最勝王寺と愛知県の岩屋寺という

遠く離れた寺院のかつての交流を、この奥書に

よって再び当研究所の調査で邂逅した奇縁は

筆舌に尽くし難いものがあります。

*調査にあたりご高配を賜りました最勝王寺住職竹林俊成人ならびにご家族様に深く感謝の意を表します。

（本学日本古写経研究所研究員 前島信也）



最勝王寺蔵思溪蔵

日本古写経研究所の活動と成果

(二〇一五―二〇二一年度)

日本古写経研究所は、二〇一五年度から五年間にわたって国際仏教学大学院大学を拠点として行われた文部科学省の学術フロンティア事業「奈良平安古写経研究拠点の形成」をもとに、さらにその事業を継続・発展させるべく二〇一〇年に新設されました。この『いとくら』はそのニュースレターとして二〇〇六年から製作され、二〇一四年までに計十号を発行しました。この第十一号を発行するにあたり、十号から今までの日本古写経研究所の活動記録をご報告いたします。

- 二〇一五年度 日本古写経研究所研究紀要創刊号発行
- 二〇一六年度 日本古写経研究所研究紀要第二号発行
- 二〇一七年度 春日若宮大般若報告書発行
- 日本古写経研究所研究紀要第三号発行
- 国際ワークショップ&フィールドワーク
- 二〇一八年度 日本古写経研究所研究紀要第四号発行
- 二〇一九年度 宋版思溪藏復刻本完成披露
- 善本叢刊第十輯発行
- 日本古写経データベース、興聖寺一切経の追加
- 日本古写経研究所研究紀要第五号発行
- 二〇二〇年度

日本現存八種一切経対照目録〈改訂版〉発行
日本古写経研究所研究紀要第六号発行
二〇二一年度
日本古写経データベース機能追加
日本古写経研究所研究紀要第七号発行

『日本古写経研究所研究紀要』創刊号〜第六号

(二〇二一年十一月現在)

日本現存の古写経や、それに付随する章疏集伝録類に対して、仏教学・歴史学・文学・国語学など多角的にアプローチする論考を掲載。主に研究所で毎年開催する公開講座で発表いただいた先生の寄稿を中心とし、そのほか七寺一切経書誌情報の掲載など、当研究所における研究成果も併せて報告しています。

根津美術館蔵「春日若宮大般若経および厨子」調査報告書

根津美術館のご協力のもと、二〇一五年〜二〇一七年に根津美術館に所蔵される鎌倉初期の尼僧・浄阿による一筆大般若経とそれを収める厨子を調査しました。そして、この調査に基づいた大般若経の書誌情報と五人の研究者（白原由起子・松原茂・藤原重雄・近本謙介・佐々木勇）の論考を報告書として刊行しました。



日本古写経研究所研究紀要第六号

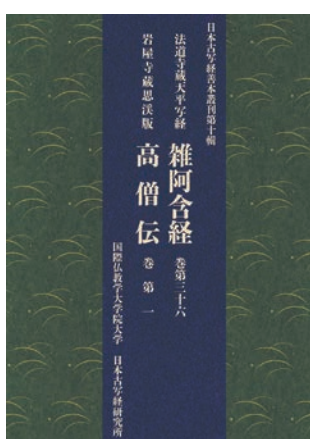
国際ワークショップ&フィールドワーク

これはブリティッシュ・コロンビア大学が主催する“From the Ground up Buddhism and East Religions”というプロジェクトに基づき、二〇一七年七月二十八日から八月二日にかけて、国際ワークショップとフィールドワークを行いました。

国際ワークショップは、「写本一切経と刊本大藏経」と題して国内外の研究者を招き、二日間にわたり十五人の方に発表いただきました。フィールドワークは、日本古写経を所蔵する大阪府河内長野市の天野山金剛寺と愛知県名古屋市の七寺、思溪版大藏経を所蔵する愛知県南知多町の岩屋寺を国内外の研究者とともに巡り、現存資料の熟覧・調査を行いました。

宋版思溪藏調査・復刻本製作

中国宋代に作られた版本大藏経のひとつである思溪版大藏経は、中国国内では既に散逸し、近世に楊守敬が日本から購入したものが現存するのみでした。二〇一四年、その楊守敬購入本を所蔵する中国国家図書館古籍館と本学が提携し、愛知県の岩屋寺のご協力のもと、中国国家図書館蔵思溪版と岩屋寺蔵思溪版を取り合わせた影印復刻本の作成を開始しました。



日本古写経善本叢刊第十輯

当研究所は、中国国家図書館所蔵本に欠けている経巻を、岩屋寺所蔵本から補うための整理・撮影を行いました。この復刻本は二〇一九年に完成し、当大学図書館と岩屋寺にそれぞれ一セットずつ寄贈されました。

日本古写経善本叢刊第十輯

二〇一九年の思溪版大藏経の復刻本完成にあわせて、日本古写経善本叢刊第十輯『法道寺藏天平写経 雑阿含経 卷第三十六・岩屋寺藏思溪版 高僧伝 卷第一』を刊行しました。法道寺所蔵の『雑阿含経』は、願文部分を欠くものの、筆致の比較・本文テキストから、奈良期の勅願である五月十一日経の傍卷であることが判明しました。思溪版の『高僧伝』は刊本ながらも、院政期から鎌倉初期にかけての非常に緻密な訓点が施されており、それを踏まえた訓読を行いました。

日本現存八種一切経対照目録〈改訂版〉

二〇〇六年と二〇〇七年に刊行された『日本現存八種一切経対照目録』の内容を修正し、丸善雄松堂が刊行する聖語蔵や実地調査の結果をふまえた改訂版を作成しました。

日本古写経データベースの機能追加

二〇一九年より、新たに京都・臨濟宗興聖寺所蔵の一切経の画像を追加し、現在までに約二千巻を公開しました。また、二〇二一年より、金剛寺一切経の書誌情報も閲覧できるようにになりました。

(本学 日本古写経研究所研究員 前島信也)

日本古写経

データベース紹介

前島 信也

日本古写経データベースは、刊本一切経が製作される以前の唐代一切経を、日本の奈良・平安末期写経群によって復元するという目標のもと、二〇〇九年から運営が開始されました。

このデータベースの基礎となるのは、二〇〇六年、二〇〇七年に作成した『日本現存八種一切経対照目録』です。この目録は、日本の八種類一切経群（聖語藏・金剛寺・七寺・石山寺・興聖寺・西方寺（大門寺）・新宮寺・妙蓮寺）に現存する経典を、『貞元新定釈教目録』に従って対照表にしたものです。この『対照目録』をもとに、本データベー



日本古写経データベース詳細情報画面

スでは金剛寺一切経全約四五〇〇巻・七寺一切経二九〇〇余巻・大門寺一切経の一部、興聖寺一切経三〇〇〇余巻を公開しています。いまだ七寺一切経と興聖寺一切経のそれぞれ二〇〇〇巻余りが公開できていませんが、一年に数百巻ずつながら着実に公開をすすめています。

また、二〇二一年三月に『対照目録』の改訂版となる『日本現存八種一切経対照目録』（改訂版）を刊行しました。この改訂版では、丸善雄松堂から刊行されている聖語藏や、各一切経の調査報告書、当研究所の調査に基づき、以前の『対照目録』の修正・改善を行なっています。それに基づきデータベース上の目録も順次修正をおこなっています。

加えて、二〇二一年十一月より、金剛寺一切経の書誌情報についても公開しました。これは当研究所の前身となる基盤研究が二〇〇七年に刊行した報告書『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』で掲載した書誌情報をデータベースに組み込んだものです。これは学外でも参照できるようにになっており、奥書を含む基本的な書誌情報を確認することができます。

将来的には、現在『日本古写経研究所研究紀要』で発表している七寺一切経の書誌情報についても同様に公開していきたいと考えています。

（本学日本古写経研究所研究員）

奈良朝勅定一切経

データベースの構築

赤塚 祐道

この度、落合俊典教授を代表とするプロジェクトでは、「勅定経」を主体とした奈良写経のデータベースの構築を進めております。「奈良朝勅定一切経」として「光明皇后御願経」と「称徳天皇御願経」のデータ集積を行っていますが、その位置づけは、我が国における写本一切経の規範となるものであり、写経一切経の中でもとくに重要な位置づけであることは言うまでもありません。まずこれらがどこに所蔵されているか探る作業を進めました。

幸いにも聖語藏に関しては宮内庁正倉院事務所編によるカラーデジタル画像が丸善雄松堂より公開されているのでここから読み取れるデータを整理し、さらに従来の研究、あるいは展覧図録を参考にしながら現存状況の確認を進めています。経題、法量、所蔵者、識語といった書誌情報、経典本文データのテキスト化を進めることにより、デジタル版の勅定一切経のデータと内容検索が容易にできるシステムとなると考えております。

当初の予定ではシステム開発を初年度に行う予定でしたが、コロナ禍にあつてなかなか思うようには進まず、二年間、試行錯

経典名	摩訶般若波羅蜜經		
巻数	巻八		
分類	五月一日経		
外題	摩訶般若波羅蜜經卷第八（原表紙・後補）		
内題	ccc般若波羅蜜經品第ccc		
尾題	波羅蜜經卷第八（押紙）「摩訶般若波羅蜜經卷第八」		
文化財指定	-		
頁数	1巻		
装丁	巻子		
訳者・撰者	ナシ		
法量	紙数	紙高	27.7
	一行字数	一紙行数	
	界線	淡墨界	天界
所在地	奈良県		
所蔵者	正倉院事務所		
経巻ID	864		

データベースサンプル画像

誤を繰り返し、ようやく一つの方向性をまとめることができました。まずは第一歩を踏み出すことができたかと安堵しているところでもあります。

只今、院生を中心に作業を進めているところでもあります。入力データが膨大なので完全公開までにはしばらく時間を要するため、随時アップロードしていく形で作業を進めています。

奈良時代の勅定一切経といった国家事業のデータを整理することは、中国唐代の写経、あるいは平安写経といった写経の流れを解明する上においても重要なデータであるといえましょう。そのデータの拠点を作り上げようとするのがこのプロジェクトであります。

（本学特任研究員）

既刊書

○『Jinhui』10冊(非売品)

本書は本学ホームページ「国際仏教学大学院大学
学術成果コレクション」上からダウンロードできま
す。バックナンバーを希望される方は下記連絡先
お知らせ下さい。

○日本古写経善本叢刊(非売品)

第1輯『玄應撰一切経音義二十五卷』

第2輯『大乘起信論』

第3輯『金剛寺藏 無量壽經』

第4輯『集諸経禮懺儀卷下』

第5輯『書陵部藏 無量壽經記』

第6輯『金剛寺藏 寶篋印陀羅尼經』

第7輯『國際佛教学大学院大学藏 金剛寺藏
摩訶止観 卷第一』

第8輯『續高僧傳 卷四 卷六』

第9輯『高僧傳 卷五』

第10輯『法道寺藏 天平写経 雜阿含経卷第三十六
岩屋寺藏 思溪版 高僧伝 卷第一』

○『日本現存八種一切経対照目録』(改訂版)(非売品)

本書は本学ホームページ「国際仏教学大学院大学
学術成果コレクション」上からダウンロードできます。

○『佛教文献と文字』

―日臺共同ワークショップの記録―2007(非売品)

○『愛知縣新城市徳連寺古写経調査報告書』

徳連寺の古写経(非売品)

○『古写経研究の最前線』

―シンポジウム講演資料集成―(非売品)

○『国際シンポジウム報告書』

東アジア仏教写本研究(非売品)

○『根津美術館蔵「春日若宮大般若経および厨子」
調査報告書』(非売品)

スタッフ紹介

研究所所長

落合俊典(本学教授・理事長)

研究所兼任研究員

藤井教公(本学教授・学長)

アレックス・フロリン(本学教授・本学附属図書館館長)

齊藤 明(本学教授・本学附属国際仏教学研究所所長)

幅田裕美(本学教授)

池 麗梅(本学教授)

末木康弘(本学仏教書誌研究プロジェクト主任研究員)

齊藤達也(本学附属図書館副館長)

池田道浩(本学附属図書館員)

伊澤敦子(本学附属図書館員)

興津香織(本学附属図書館員)

信賀加奈子(本学附属図書館員)

特別研究員

赤尾栄慶(京都国立博物館名誉館員)

牧野和夫(実践女子大学研究推進機構研究員)

学内研究協力者

赤塚祐道(本学特任研究員)

青木佳伶(本学特任研究員)

研究員(PD)

前島信也

研究補助員(RA)

浅野 学

本号の編輯担当

新田 優・浅野 学

(令和4年3月現在)



CONTENTS

Toshinori OCHIAI, Message on the Occasion of Reviving the <i>Itokura</i> Newsletter Series	1
Eikei AKAO, On the National Treasure Scripture of the <i>Jingang chang tuoluoni jing</i>	3
Toshinori OCHIAI, Three Mysteries Surrounding the Manuscript of the <i>Jingangchang tuoluoni jing</i> (National Treasure)	4
Shōshun HAYASHIDERA, <i>Gogatsu Tsuitachi Kyō</i> Manuscript Corpus Owned by the Fuse Art Museum	5
Manabu ASANO, The <i>Hokke ron</i> Manuscript in the Kōshō-ji Collection	6
Kazuo MAKINO, A Suggestion Concerning the Numeration of Boxes in Accordance with the <i>Qian zi wen</i> of the Dongchan-si Woodblock Edition of the <i>Tripitaka</i> : From the Perspective of Double-Sided Printing	7
Yasuhiro SUEKI, The Buddhist Bibliography Project	8
Tomofusa UESUGI, Book Review: Maejima Shin'ya, <i>A Study of Kyōsai-bō Shinzui: Discussing Kamakura Pure Land Texts</i>	9
Yū SHINDEN, The Study of the <i>Tiweiboli jing</i>	11
Shinya MAEJIMA, The Saishō'ō Temple	12
Shinya MAEJIMA, Report on the Activity and Results of the Research Institute for the Study of Old Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures (Academic Years 2015 Through 2021)	13
Shinya MAEJIMA, Introducing the Database of Old Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures	14
Yūdō AKATSUKA, Preparing the Database of the Buddhist Canon Established by Imperial Edict in the Nara Period	14
Introducing Previous Publications and Current Staff	15

国際仏教学大学院大学
日本古写経研究所ニューズレター

Newsletter of the Research Institute for the Study of Old
Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures
of the International College for Postgraduate Buddhist Studies

いとくら 第11号

令和4年3月31日発行

編集・発行 国際仏教学大学院大学
日本古写経研究所
〒112-0003 東京都文京区春日2-8-9
URL <http://www.icabs.ac.jp>
E-mail nihonkoshakyo@icabs.ac.jp

印刷 株式会社 高山

ITOKURA Vol.XI

Published by Research Institute for Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures of the International College for Postgraduate Buddhist Studies
2-8-9 Kasuga, Bunkyo-ku, Tokyo 112-0003, Japan
© Research Institute for Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures of the International College for Postgraduate Buddhist Studies 2022
Printed in Japan at Takayama Co. Ltd., Tokyo